

### ・環境クイズとインタビュー、一代記の作成

全部で30項目の環境クイズは、自分の身の回りのことについての質問。この質問に対していくつ答えることが出来たか、また、知らないもののうち、調べてみようと思ったことはいくつあったか。これらを考えることにより、知らないことは恥ずかしいことではなく、知ろうとしないことが恥ずかしいことだということに気付かせられる機会となりました。

また、同様に事前課題として取り組んだ、地元の人へのインタビュー。最低10人で、出来れば50人というノルマは、今働いているこのまちが生まれ過ごしたまちでない私にとっては非常に辛い課題として映っていました。しかし、インタビューをしてみると意外とみんなが真剣に答えてくれた上に、様々なお話を伺うことが出来ました。自分が住んでいる地域について興味を抱くきっかけとなりました。

そして、その延長として一代記の作成へと繋がり、私の住む地域の町内会長さんにスムーズにお話を伺うことが出来ました。人の話を真剣に聞く力、これがないものねだりをやめて、あるもの探しを行う時にとっても重要なことと気づいたのは東京に行ってからです。

### ・東京での講義

吉本さんや横尾さんが取り組んできたのは、自分育て。困った問題を想像的に解決する力を養うのが地元学。「想像する力とは、遊びや機知のこと、親友よりも悪友の方が面白いのでは。悪いことをしなくていいが、悪人になれ。」と笑って言う。事前課題は、見えないものを見つけたり、話を聞いて絵地図を作ることで、本質を引き出すことの訓練であるという位置づけでした。

「聞いた事は、その日のうちに書き出す、そして、聞きに行く前の状況や聞いた時の風景を思い出しながら書くとなお良い。大事なのは3回聞くこと。聞くのは人だけではなく、山や川、土にも聞いてみることで、自分の暮らす地域の風土について知ることが出来る。その地域の個性を把握し、自分に落とし込んで説明することが出来るまでに至れば、奇跡が起きる。」

そして、奇跡の一つである水俣の話。水俣というだけで、世間から壮絶な差別にあっていました。でも、世間は変えられないから水俣が変わろうとした。水俣は海の者と山の者を繋げることによって、再生することができたまち。これも出発は地元学でした。

「水俣だから出来たのではない。普通の人達の力を引き出すことが勝負であり、新しいことを見出さないと地域は衰退してしまう。人は言葉では変わらず、感動して変わる。下手でもいいから地域を調べること。役立てるために調べた。」

この言葉の意味を水俣で知ることになりました。

## ・水俣での体験

頭石地区は、集落全体を「村丸ごと生活博物館」と位置づけ、訪問する人々に地域を案内するとともに、この地域で取れる食材を使った料理でおもてなしを行っています。ここで、地域の方々と「あるもの探し」を行い、地域に住む方が当たり前だと思っていたものに価値を見出すことにより、さまざまな地域から人を呼び込んでいました。若い人がいなくなるのは日本全国どこも同じ。足元を見直し、そこで暮らす普通の人の力を引き出すことを実践していました。

現場を体感した後、自分たちの地元学について発表。発表した内容ではなく、役立てるために調べたのかどうか。そして、限られた時間での自由発想会議。これらを終えて、最後に吉本さんから一言。

「地元学は物知り学ではないということ。行政職員は想像力を働かせるのが苦手。入口を狭めて論点を絞る訓練が必要である。」

この一言が、これまで数カ月、地域に入り込もうとしてきた私達へのヒント。今後、私達が地元に戻って働く際、実際にどのような行動が出来るか。「まず、やれえ」と言ってくれる人がいなくても、地域のことを本気で考えて、動いてみようと思いました。